
定時制高校に対する地域臨床的支援の意義

—インタビュー調査を通して—

Survey Interviews on How Teachers and Students Recognize our Community Clinical Psychological Support Activities for an Evening High School

中島妃佳里 津田政志 中條淳博 井上菜々 細見知加
山見有美 吉川真衣 西中さおり 中田行重

関西大学臨床心理専門職大学院

Hikari NAKAJIMA, Masashi TSUDA, Atsuhiko CHUJO,
Nana INOUE, Chika HOSOMI, Yumi YAMAMI, Mai YOSHIKAWA,
Saori NISHINAKA and Yukishige NAKATA

Graduate School of Professional Clinical Psychology, Kansai University

◆要約◆

これまで筆者らは、ある定時制高校において相談室の開室やグループワークなどの支援活動を続け、その報告を行ってきた。しかし、ユーザーである先生方や生徒らからどのように認識されているのかは明らかになっていなかった。そこで今回、校内支援委員会の先生方と相談室を利用していた生徒を対象にインタビューを実施し、活動がどのように認識されており、どのようなニーズがあるのかについて調査した。その結果、筆者らの活動が、生徒らにとって“安心して話せる居場所”を提供していたことと、生徒同士や、先生と生徒という関係とは異なる「斜めの関係」(平井, 1997; 文部科学省)で生徒とつながっていることなど、筆者らならではの意義が示された。また、支援活動へのニーズとして、①先生方との情報共有、②学習支援、③就職・キャリア支援の3点が明らかとなった。今後の課題は①校内支援委員会の機会を持ったり、共有ノートを活用していくこと、②筆者らの専門性を活かしながら関係づくりを行い、生徒らの登校意欲や学習意欲向上につなげること、③筆者らの体験談を生徒に語ることで、生徒らの進路について共に考えていく場を作っていくことなどが考えられた。さらに、相談室をより親しみのあるものにしていくため、「相談室」という名称を見直していく必要性についても考察された。

キーワード：定時制高校、地域臨床、支援、インタビュー、斜めの関係

Abstract

The authors have been reporting on our activities to provide community clinical psychological

support for an evening high school. However, thus far, the issue of how teachers and students recognize our activities, have not been addressed. Hence, interviews were conducted. The interviews found that our activities have been offering some space for students to feel safe in a “diagonal” relationship that has a different quality from that between students and teachers. It also became apparent from the interviews that we are expected to: 1) share information with the teachers; 2) assist students for learning in class; and 3) engage further in students’ career development. We are hoping to: 1) have a meeting together and share a notebook with teachers; 2) motivate students to attend school and study with our own expertise; and 3) offer some opportunities for students to consider career and academic development by disclosing our own personal experiences. In addition, the possibility of changing the name of the room from “consulting room” to something else in order to make it more accessible for students was discussed.

Key words: evening high school, community clinical psychology, support, interview, diagonal relationship

はじめに

筆者らは一昨年、昨年と、ある定時制高校の支援要請に対して大学院生と教員によるチームを組み、院生がボランティアとしてその高校を支援する試みを続け、経過の報告を行ってきた(中田、中村、日野ら 2011; 倉石、横谷、梅井ら 2012)。これまでの経過報告はあくまで、筆者ら支援者側からの報告のみに留まっており、ユーザーである先生方や生徒から、筆者らの活動がどのように認識されているのかは明らかになっていなかった。また、今年度の活動は先生方との連携する機会が増えたことや、相談室の場所の変化、校内支援委員会への参加などを通して、支援システムが形作られ始めたことと筆者らは感じている。そこで今回、先生方や相談室を利用している生徒からこの活動がどのように認識されているかについてインタビューを行った。それをもとに、これまで行ってきた支援の意義を考察するとともに、先生方や生徒のニーズを把握し、今後の課題を検討する。

インタビュー調査

1. 先生方へのインタビュー

対象は校内支援委員会の先生方であり、校長先生・教頭先生・特別支援コーディネーター・

各学年主任・生徒指導・進路指導・養護教諭の10名であった。調査方法は、筆者らの支援活動中に、先生方の都合のよい時間に少し話を聞かせてもらう、という形をお願いした。筆者らの支援時間が週2日2時間のみという限られた時間であるため、授業などの関係で時間が合わない先生には、インタビュー用紙を渡し、後日、記入していただいたものを回収した。

インタビューでは、以下の5点について尋ねた。

- ①筆者らが高校に入ることによってどのような変化があったか(相談室、グループワーク(以下GW)、その他)
- ②スクールカウンセラー(以下SC)とはどのような点で異なっているか
- ③現時点での満足度はどのくらいか
- ④現在あるいは今後、筆者らに対してどのようなことを期待するか
- ⑤全日制と異なる定時制の難しさは何か

2. 生徒らへのインタビュー

相談室に来室した生徒にインタビューを行った。他の生徒がいると自由な回答が出来ない可能性を考慮し、相談室に来室している生徒が1名の際に行うこととした。また、生徒に調査されているという印象を与えないために、「相談室をより良くしていくためのアンケートに協力し

て欲しい」という形で回答を求めた。

インタビューでは以下の3点について尋ねた。

- ①相談室はどういう場所か・院生はどういう存在か
- ②養護教諭 or 保健室とはどのような点で異なっているか
- ③相談室 or 院生に期待していることは何か

結 果

先生方と生徒へのインタビューの結果は以下の通りである。また、各項目の結果の直後にその考察を並べて示すこととする。

1. 先生方へのインタビュー結果

上記の5項目のどれにも該当しなかった回答を、⑥その他としてまとめた。

①筆者らが高校に入ること、どのような変化があったか（相談室、GW、その他）

これまでの活動について「安心感がある」「教員の人手が足りていないので、代わりに相手をしてもらってありがたかった」「生徒さんにとって居場所になっているのではないか」という、肯定的な回答がみられた。しかし、「クラス担任でないため変化があまり分からない」という回答や、「担当学年と筆者らの接点が少ないため分からない」という回答もみられた。

《考察》今回の結果では、生徒を任せられる安心感があるという肯定的回答が多くみられた。これは3年間の活動を通じて、先生方とのある程度の信頼関係を築くことができた結果と言えるだろう。また筆者らが、生徒にとって安心して話せる居場所になっていると先生方に感じられていることもうかがえた。

私たちの活動による変化が「よく分からない」と実感の乏しい回答もいくつか見られたが、この回答は、筆者らが現在中心となって関わりを持っている1年生以外の担任の先生や、担任を受け持たない生徒指導部長の先生のものであった。筆者らの支援は心理的側面を中心に扱って

おり、短期的にみると支援の意味や生徒の変化は気づかれにくいであろう。そのため、筆者らが積極的に情報共有を行い、先生方に活動を知ってもらうことは不可欠である。それによって筆者らの支援も実感のあるものと感じられたり、幅広い支援にもつながると考えられる。

②SCとはどのような点で異なっているか

筆者らは、「生徒との歳の近さが、生徒にとっては親近感が持てる」立場という回答がみられた。また、「コモンスペースなどで話を聞くため先生からも目に見える」ことで、「安心感」を感じられているようだった。SCは、資格を持ち、「かなりしんどい子（精神科等で何らかの診断を受けている生徒など）」を主に対象としており、それに加えて保護者、先生への相談を行っている立場と捉えられていた。しかし、SCに相談すれば出席扱いになるため、広く生徒に公開してしまうと、SCが対応する生徒が増え、本当に専門家からの支援が必要な生徒の機会を奪うことにもなりかねず、「かえって生徒に言いにくい」という回答もみられた。このように院生とSCの役割は先生方の中では区別されており、筆者らは先生・生徒どちらにも身近な存在であることがわかった。さらに、ある先生からは筆者らとSCの両方に対して「学習の支援もしてほしい」という回答もあった。

《考察》筆者らは、先生方に「安心感のある」、生徒にも近い存在という印象を持たれているようであった。これは相談支援活動がオープンな場所で行われており、活動が先生の目に入りやすいことが「安心感」につながったと考えられる。それに対しSCは、カウンセリングを行う専門家であり対応の難しい生徒に関わる存在だという印象が強いようであった。SCが臨床心理の専門家として、筆者らが生徒や先生方と近い距離感でそれぞれ関わり、互いが連携していくことができれば、支援が広がりを持つと考えられる。また、先生方から筆者らとSCに学習支援をして欲しいという要望もみられた。現在は、筆者らが学校に滞在している時間が2時間と短

く、相談室への来室生徒が多かったり、1対1での対応が望ましい生徒がいたり、授業支援にまで手が回らないこともしばしばである。支援メンバーの増員といった具体的な策を講じる必要もあるかもしれない。

③現時点での満足度はどのくらいか

10名中7名の先生から、肯定的な評価を得ることができた。特に、「今年はいい流れにあると思う」「去年と比べて先生方と院生との距離が近くなったと感じている」「特に今年は教員と連携できてきている実感がある」と、活動当初から関わりのある先生方から肯定的な回答が得られた。また、「支援自体が曖昧なものだが、その中でよくやってもらえていると感じている」「生徒の声を真摯に受け止めてくださり、感謝しております」という回答や、「教員にとっても生徒にとっても、相乗効果的に良いと思う」という回答があった。

一方それ以外の回答として、「教育はすぐ結果が出ない。学校とは違って、どれくらい彼らができるようになったのか、などを測ることができない」「2年生はあまり利用していないのでわかりません」などの回答もみられた。

《考察》肯定的な回答の中でも特に注目すべきは、支援当初から関わりのある先生方からのものだろう。これには校内支援委員会に2度参加するよう要請を受け、来学期の支援の方向性や来室した生徒の情報を共有したこと、先生方の要望を聞くことができたことが関係していると考えられる。筆者らも昨年度以上に先生方と密に連携を取ることができたと実感している。一方、「2年生はあまり利用していないのでわかりません」という回答が得られたが、これは相談室の場所の変更に伴い、1年生と比較して他学年の相談室利用者が少ない現状が関係していると考えられる。支援の「結果を測ることができない」分、筆者らもこの活動がどのように役立っているのかを測ることは困難だと感じているが、先生方や生徒らの実感を重視しながら、今後も活動を随時改善していく必要があるかもし

れない。

④現在あるいは今後、筆者らに対してどのようなことを期待するか

これについては大きく①情報共有、②学習支援、③就職・キャリア支援の3つがあった。

情報共有には、校内支援委員会のような情報共有の機会を増やし、「教員、院生のそれぞれの視点で情報を共有」したいという回答がみられた。特に担任の先生から情報交換を求める回答が多く、誰と何を話したか知りたい、「メモ書きなどで共有したい」という具体的な回答も挙がった。

学習支援には、「力を入れていただきたい」という回答に加え、欠課が多いと進級に関わるため「まずは授業に行くように促してほしい」という回答もみられた。

就職・キャリア支援には、「院生と生徒のこれまでの人生や生き方について話す機会をもってほしい」という筆者ら自身の体験談を伝えてほしいという回答がみられた。

3点以外にも、登校することが難しい生徒のモチベーション向上につながるような支援や、「生徒のモデルになったり、SST的な方法を用いて、生徒が社会に適応していくために必要な力を身につけさせてほしい」という支援に対する期待もみられた。

《考察》情報共有は、今年度の校内支援委員会において生徒情報の共有を行ったことで、効果が実感され、回数を増やす要望につながったのではないと思われる。また、先生方との情報交換を目的に、前年度の教頭先生から『共有ノート』が用意されており、現在も支援の最後に来室した生徒の名前や話題を記しているが、これが十分に周知できていないことがうかがえる。今後、『共有ノート』の周知度と、その活用方法について確認し、再考する必要がある。

学習支援は、教室で授業についていけない生徒のフォローや抽出支援が挙げられる。これまでも筆者らの存在を周知してもらうための活動の一環として学習支援を行っていたが、筆者ら

の専門性をより活かしたいという思いから相談室業務の比重が大きくなっていった。しかし、学習支援を生徒と個別に関わることができる場でもあると捉え、活動していくことが望ましいと考えられる。

就職・キャリア支援は、卒業後のイメージを持つことで、登校意欲や社会活動へのやる気につながると考えられる。これについては今年度のGW企画時にも、「キャリアの視点を含めた企画内容にしてほしい」との要望を受けており、以前から先生方の要望はあったといえる。これまで筆者ら自身の人生や生き方について話す機会はなかったが、そのような活動を行うこともキャリア支援につながるかもしれない。

その他にも筆者らに対する様々な期待感があり、これらについて先生方の要望を柔軟に受け入れながら対応していく必要がある。

⑤全日制と異なる定時制の難しさは何か

定時制高校独自の難しさとして、公立高等学校授業料無償化により、「発達障害や精神障害がある生徒や、高齢者の方、また中学校、高校に行けていない生徒など、何らかの問題を抱えている」生徒が増えていることが挙げられた。それに伴って、生徒対応に苦慮していることが明らかになった。特に対応が難しい例として、障害のある生徒、高齢の生徒、家庭環境や不登校、いじめの経験があるなど、何らかのしんどさを抱える生徒が挙げられた。障害のある生徒については、「就職支援について、パイプや人脈、ノウハウがなく難しい」「具体的に〇〇さんにSSTが効果的なのかなど、実際の場面でどのような対応が有効なのかがわからない」という声が聴かれた。高齢の生徒に対しては、「考えが凝り固まった、偏った人が多く、現役の若い生徒よりも手のかかる人」や「元々高校生向けのカリキュラムのため、不満を持つ」人がいる、との回答があった。しんどさを抱える生徒は、家庭環境が複雑なため「家庭学習の課題を出しにくい」ことや、「会話が苦手なコミュニケーション能力が低い」生徒がいる、という回答があった。

一方、困難な点だけでなく、「高齢の生徒が未成年生徒にとって良いモデルとなると思う」という回答や、「本校だとしんどい子はコモンスペースにいたり、院生の相談室に行くことができる」など、定時制高校であることや、この高校だからこその良さについても聴取することができた。

《考察》全日制とは異なる定時制高校の難しさについて、さまざまな問題を抱える生徒が増えているという回答が大半を占めた。全日制進学者が増大し、高校教育がユニバーサルデザイン化するにつれ、全日制受験失敗者や学習意欲の低い生徒や不登校経験者、障害のある生徒が定時制に多数入学するようになった（片岡，1983；大谷、柿内，2011）。このような生徒への個別の対応は定時制高校特有の難しさであると考えられる。

障害がある生徒については学習支援や対応の問題など、教育の専門家である先生方には困難なケースがあるため、筆者らは心理学を学んでいるという専門性を活かして、「ケース化」（倉石、横谷、梅井ら 2012）に取り組むなど、対応を模索している最中である。また、高齢の生徒の中には未就学者もおり読み書きが不得手であったり、過去の経験に捉われがちであるため、若い生徒とは異なる対応の難しさがある。しかし人生経験を豊富に積んだ高齢者として、若い生徒への見本となるような存在と捉えることで、対応の改善となったり、高齢者の自己肯定感の向上にもつながったりする可能性も考えられる。このようなピアサポートのような関係性を築けるようGWなどを通して筆者らが促すよう努める必要があるだろう。

しんどさをなかなか人に話すことができない生徒にとって、相談室が話を聞いてくれる場となるよう、生徒と筆者らの信頼関係づくりに重点を置くことは筆者らの支援において最も重要なことである。しかし、高校という教育機関で授業の出席単位は重要であるが、筆者らが心理学を専門としていることもあって、しんどさを

感じて相談室にやってくる生徒の話を中断してまで授業に出席させるかどうかという葛藤もある。SCへの相談とは異なり、相談室にいても出席には換算されない立場にある筆者らであるからこそ、考えられる問いであり、取り組み続けることのできる課題であるともいえるだろう。

⑥その他

「個別支援を手厚くすると、それを求めて入学してくる生徒も増え、教員の負担増加や、特別支援のノウハウもないため対応が難しい」「近年、教育現場では経済性や効率性、教員の能力評価が求められており、効果がすぐに表れない心のサポート、すなわち生徒の話を十分に聴く先生方も少なくなっている」といった回答もみられた。

《考察》定時制高校が個別支援を充実させることに伴い、教員の負担が増加していることが推察される回答があった。2010年から始まった公立高等学校授業料無償化などの影響により、特別支援が必要な生徒や人との関わりが難しい生徒など、様々な問題を抱えた生徒が増加している。このような生徒の多様化に伴って先生方が日夜生徒の対応に奮闘しておられることは想像に難くない。筆者らもインタビューで得られた先生方の声を通して、生徒1人1人としっかり関わっていく必要がある。

2. 生徒らへのインタビュー結果

今年度はインタビューの開始時期が文化祭以降であり、山見、細見、吉川ら(2013)でも示した通り、生徒の来室数が減少している時期であったため、インタビューを実施出来たのは3名のみであった。うち2名は相談室の利用頻度が高い生徒であり、1名は数回のみ利用した生徒であった。

①相談室はどういう場所か・院生はどういう存在か

利用頻度の高い生徒にとっては、「話を聴いてくれるし、(反応が)返ってくる」「心の休憩所」など、居心地の良い場所になっているようだった。数回のみ利用した生徒にとっては「必要な

人には必要な場所。たまに来たら面白い」という少し特別な場所という認識は持ちながらも、肯定的に受け入れられているようであった。

《考察》利用頻度の高い生徒は話を聴いてくれる「居心地の良い場所」「心の休憩所」という印象を抱いており、これまで掲げてきた生徒の居場所づくりという相談室の役割を多少なりとも果たせていると考えられる。定期的に利用しない生徒にも特別な場所という認識を持ちながらも肯定的に受け入れられているようであった。

②養護教諭 or 保健室とはどのような点で異なっているか

保健室を「体調不良の生徒が行く場所。先生と生徒の関係」、相談室を「先生と生徒の関係ではない。気軽に話せる関係」と捉える回答や、「保健室は本当にしんどい時しか使えない」という回答がみられ、また、「相談室では集団で話せる。男女がいるのも話す相手を選べていい」という回答もあり、男女混合かつ複数名の院生で支援を行っていることの意義が感じられた。《考察》生徒らは、保健室と相談室を生徒なりに使い分けていること、相談室は生徒らにとって気軽に來ることが出来る場所であり、院生を身近な存在と捉えていたことが分かった。現在抱えている悩み事について個別で話すこともあれば、集団で話をすることもあり、このような場は人と関わる経験を積むという点で有用だと思われる。

③相談室 or 院生に期待していることは何か

相談室については、「開室回数が増えてもいいのでは」「時間を増やしてほしい」など、支援時間の増加を求める回答がみられた。筆者らについては、「院生が経験したことを聴いてみたい」「心理ゲーム」をしてほしいという具体的な要望も語られた。

《考察》支援時間を増やしてほしいという回答がみられた。学校教育の経費削減などによって、現在は生徒にとっての居場所が保健室に限られている。保健室も、多くの生徒がいればゆっくり自分の話をするのも難しく、その点では相

談室が多少なりとも生徒の「居場所」として機能していると考えられる。また、「院生が経験したことを聴いてみたい」「心理ゲーム」をしたいという具体的な要望も語られた。相談室を「話す－聴く」関係のカウンセリングや心理アセスメントを行う専門的な場と捉えるのではなく、臨牀心理の視点や傾聴の態度をもちながら、筆者らの話をしたり、ゲームなどを通して交流を図ることは、生徒らとの関係づくりにおいて重要だと考えられる。今後も生徒の要望にも応えていながら、筆者らと生徒とのよりよい関係づくりに努めていく必要があるだろう。

総合考察

インタビューから筆者らの活動の意義と、支援活動へのニーズは以下のように整理することができる。

まずこの活動の意義として、“安心して話せる居場所”となっていた点がある。支援当初のニーズとして、生徒のしんどさを話す場所や居心地の良い場所となることや、様々な問題を抱える生徒の対応を求められていた（中田、中村、日野ら 2011；倉石、横谷、梅井ら 2012）。そのため、筆者らの活動が生徒の「心の休憩所」として居心地の良い場所になっていたり、先生方にとって「安心感」のあるものになっていたことは、この活動の意義だといえるだろう。

そして、筆者らが生徒と「斜めの関係」（平井，1997；文部科学省）で関わっていることも意義があるといえる。筆者らは「先生－生徒」のような“縦の関係”や友達同士のような“横の関係”でもなく、程よい距離感を取りつつも話しやすい相手という立場で生徒と接している。この関係だからこそ「横の関係」や「縦の関係」における悩みやしんどさを生徒から聞くことができたり、新たな“安心して話せる場所”となっているのではないかと考えられる。「斜めの関係」は、斜めに立っ立場の者が相手に上手く働きかけることによって、相手が「横の関係」

を広げていく可能性があるといわれており、その有用性が記されている（平井，1997；池田，1997）。筆者らの活動は、斜め上の位置から、生徒が横の関係（友達）に歩みだせるよう促しながら、そのさらに斜め上にある縦の頂き（先生）に向けて繋いでいく「触媒の役割」（豊嶋，2004）を担うといえ、今後も活動の幅を広げていきたいところである。

また、支援活動へのニーズとして情報共有、学習支援、就職・キャリア支援があることが分かった。情報共有については、先生方が生徒の情報や筆者らの活動内容について知っておきたいという声が多くみられ、これは今後連携を強化していく上で必要不可欠なものだと考えられる。また学習支援については、高校という教育機関だからこそ、そして就職・キャリア支援については、定時制高校という特徴柄、生徒がよりよく今後の人生を歩んでいくうえで重要な項目であると考えられる。この3点のニーズについては、筆者らも継続的に取り組んでいくべき内容であると考えているものであり、次項の今後の課題において論じることとする。

今後の課題

今後の課題として、①情報共有②学習支援③就職・キャリア支援④相談室の4点を考えていく必要がある。

1点目の情報共有については、校内支援委員会の機会を多く持つことや、『共有ノート』の活用があげられる。前者は今年度、生徒の情報や先生方の要望などについて情報共有でき有益だったと先生方も筆者らも実感していることから、今後も継続的にやり連携づくりに努めたい。今年度の実感を考慮すると、校内支援委員会の機会を多く持つことで先生方と筆者らはより活発な意見交流ができ、生徒の情報共有も綿密にできるだろう。先生方と筆者らの回答の相違や生徒の変化などについても、早期に対応することができればより適切な支援が行えると考えられ

る。後者については、特に校内支援委員会に所属しておられない先生方や、担任を受け持たない先生方との情報共有において有益だと考えられる。筆者らの活動時間に制限があることや、必ずしも毎支援日に全ての先生方と直接情報共有を行えるとは限らないことなどを考慮すると、この共有ノートは非常に重要な役割を担っていると考えられる。共有ノートの活用を通して様々な立場の先生方と連携を取り、先生方から多くの回答を取り入れることで筆者らの活動も厚みを増していくであろう。

学習支援については、教育的立場と筆者らの心理学的立場に関して、現在まで常々葛藤してきており（中田、中村、日野ら 2011；倉石、横谷、梅井ら 2012）、筆者らも授業中に入室した生徒を授業へ行くよう促すべきか、相談室に居ることを受け入れるべきか、対応に苦慮した経験がある。今後は、先生方と生徒の情報を共有し、心理的・教育的な視点をそれぞれもって個々の生徒に対応していく必要があるだろう。つまり、生徒の出席日数の状況なども加味しつつ、筆者らの専門性を活かして生徒らと関係づくりを行ったり、学校に来ること、生きることの意義を生徒に生じさせたりしながら、先生方の求める支援に還元していくことが望まれる。

就職・キャリア支援は現在、GWの目的としてキャリア教育の視点を取り入れ、実施している（山見、細見、吉川ら 2013）。しかしながら相談室に入室した生徒に対し、個別的に、進学や就職などの進路について話したり、筆者らの人生について語る機会を持ってこなかった。筆者らと生徒らの「斜めの関係」を活かし、「横」や「縦」の関係では話せない自分の就職・キャリアの話について耳を傾けたり、筆者らの人生や思春期の悩みを話したりすることで、これからの人生の歩み方についてともに悩んだり、提案したりできる立場となっていくことが必要かもしれない。

4 点目について、利用者である生徒が相談室を「特別な場所」と認識していることの一つに、

相談室という名称が影響しているのではないかと考えられる。保健室とは異なり、「相談室」という名称は高校生にとって馴染みがなく、相談をする場所と認識されている可能性もある。生徒らへのインタビュー結果より、利用頻度が低いと相談室を訪れにくくなることが推察される。したがって、「相談室」という名称を「ほっと・ルーム」（亀口、高橋、堀田、2000）や「オープンルーム」（瀬戸、2006）など、親しみのある名称に変更し、現在よりも立ち寄りやすい場所にしていく必要があると考えられる。生徒にとって相談室が誰かに相談したり、話したりする際の一つの選択肢としてさらに浸透していけば、これまで以上に筆者らの支援の幅が広がり、有用性も高まっていくだろう。

謝辞

お忙しい中、インタビューにご協力頂きました某定時制高校の先生方、生徒の皆様にご心より御礼申し上げます。

文 献

- 平井賢二（1997）：生活を共に 池田豊應（編著）『不登校：その多様な支援』大日本図書 pp.145-170.
- 池田豊應（1997）：不登校とは—その人間的理解と治療論的方向付け— 池田豊應（編著）『不登校：その多様な支援』大日本図書 pp.13-37.
- 亀口憲治、高橋均、堀田香織（2000）：（付録）学校臨床総合教育研究センター分室東京大学教育学部附属中・高等学校：こころの相談室「ほっと・ルーム」開設『学校臨床研究』1（2）：55-64.
- 片岡栄美（1983）：教育機会の拡大と定時制高校の姿『教育社会学研究』38：158-171.
- 倉石百合子、横谷幸美、梅井茜、高石唯、船曳奈央、中條淳博、津田政志、中田行重（2012）：定時制高校に対する地域臨床的支援の試み（その2）『サイコロジスト：関西大学臨床心理専門職大学院紀要』2：71-78.
- 文部科学省：学校は、地域の人材を活用して「ナナメの関係」をつくらう！文部科学省 HP：http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/040/toushin/07030123/002.htm（最終アクセス日：2013/2/1）.
- 中田行重、中村絢、日野唯香、丹羽由子、福山侑希、菅野百合子、横谷幸美（2011）：定時制高校に対する地

域臨床的支援の試み『サイコロジスト：関西大学臨床心理専門職大学院紀要』1：23-31.

大谷直史、柿内真紀（2011）：定時制高校における生徒象の変容と生徒指導方針『教育研究論文集』1：3-9.

瀬戸瑠夏（2006）：オープンルームにおけるスクールカウンセリングルームという場の構造『教育心理学研究』54（2）：174-187.

豊嶋秋彦（2004）：教員養成学からみた不登校生のサポートと「斜めの関係」『弘前大学教育学部紀要 教員養成学特集号』6：27-42.

山見有美、細見知加、吉川真衣、西中さおり、中條淳博、津田政志、中島妃佳里、井上菜々、中田行重（2013）：定時制高校に対する地域臨床的支援の試み（その3）『サイコロジスト：関西大学臨床心理専門職大学院紀要』3.